

新しい仲間たち 新入会員紹介 ー災害に力を合わせて立ち向かおうー

神奈川レスキューサポートバイク ネットワーク



代表者：矢代 幸雄
連絡先：080-6731-3963
会員数：25名

発足は1998年で今年で20年間神奈川県及び近県で活動を続けてきています。オートバイクの機動力とそれを支援するネットワークにより、震災時の情報活動や救援活動の支援を行い、オートバイクを通して地域社会の貢献することを目的としています。

1. 主な活動実績

熊本地震、東日本大震災、中越沖地震、中越大地震、有珠山噴火

2. 平時の活動

地域防災訓練、オートバイク運用訓練、無線訓練、他団体との連携活動

3. 最近の訓練活動を3つ程紹介させていただきます。

1) 救命講習（他人を助ける）

山梨県北杜市消防署の救命救急隊員からAED使用を含む心肺蘇生や2輪事故に遭遇した際の対応方法の指導を受けました。繰り返し行うことに意味があるので毎年重複した内容も組まれます。基本となるAEDと心肺蘇生は毎年行います。

2) 相模原赤十字病院防災訓練参加（災害救援を知る）

相模原赤十字病院が中核医療機関として毎年行ってい



る災害時を想定した傷病者受け入れ訓練に傷病者役として参加しました。この訓練では得る物は大きく、平時の対応と大規模災害の対応の違いを肌で感じる事が出来る貴重な訓練だと思います。大規模災害時はなるべく多くの人を救うために心肺停止の患者には治療をし続けることはできません。平時とは異なった厳しい判断をしなければならない訓練のお手伝いができる事は我々の重要な活動の一つです。

3) オートバイク実技訓練（自分を助ける）

山梨2輪普及協会と2輪安全運転推進委員会の指導による実技訓練です。

我々はオートバイクでも活動できるボランティアとして活動中や移動中に事故を起こして迷惑を掛けないために、ライディングの基本となる制動、バランス感覚の訓練を行います。それらの成果として走行に余裕が出来、まわりをよく見ることが出来、運転に余裕が生まれます。この余裕は、自分が事故の当事者になる確率を低下させてくれます。

以上、簡単ではありますが神奈川RBの災害支援以外の活動の一部を紹介させていただきました。

及活動、地域防災実践ネット、災害VCキットの活用について、防災科研と情報交換、災害時に必要な情報の電子地図の作成などを行っています。ビッグレスキュー、九都県市、防災ギャザリングなどの防災訓練にも積極的に参加しています。

今年度は毎第3土曜日の定例会の前に、勉強会を開催しています。最近のテーマは、Googleサイトの使い方、地域防災実践ネットの紹介、Googleフォームの作り方、使い方などです。一緒に活動する個人会員、団体の会員を募集しています。災害に活かすICTツールについて学びたい団体向けには、講師派遣も行います。

ICTを防災に活かす力を身につけませんか？



かながわ災害情報連絡会（ICTかながわ）

代表者：市原 信行
連絡先：090-9349-5410 046-244-5260
会員数：16名

平成26年7月～平成28年11月まで、かながわ県民センターで合計25回開催された、「ICTを活用した災害ボランティア情報収集交換に関する研究会」の中で、平成28年2月に設立しました。

研究会の流れを受けて、災害時に、ICTを活用して情報共有ができる仕組みの研究や普及を行うことを主目的としていきます。

平成30年10月現在、代表幹事市原信行ほか正会員は、個人、団体合わせて16です。

現在は、正会員の東海大学内田理教授のグループが開発したDITS（Twitter投稿に、位置情報、住所、ハッシュタグを自動付与する写真、情報発信ツール）の普

編集後記



西日本豪雨被災地で奮闘するボランティア

そなえよつねに（Be Prepared）

これは、よく知られているボーイスカウト以上のスカウトと指導者のモットーです。「何事に対してもいつでも必ずやり通すという準備を常にしておく」という意味です。いつも心にも体にも、技にもすきの無いよう、どんなことにも応じることが出来る心構えを持って「さあこい、準備は出来ている」ということを意味しているとされています。

非常時に役割を果たすためには、平時における「そなえよつねに」が重要になります。災害ボランティアは、一人ひとりがまず生き延びるための技能を身につける努力を怠らないが大切。そしてその集団である災害ボランティアネットワークは、普段から連携する努力を怠らないことが大切です。「顔の見える関係づくり」これにつきます。皆で心を合わせて、力を合わせていきましょう。
(広報委員：大田哲夫・丸山善弘・田口謙吉・石田昌美)

神奈川災害ボランティアネットワークNEWS



発行：NPO法人神奈川災害ボランティアネットワーク
〒222-0033 神奈川県横浜市港北区新横浜2-6-13 新横浜ステーションビル9階
TEL045-473-1031 FAX045-473-9272 URL <http://ksvn.org>

西日本豪雨災害・災害ボランティアバスの派遣事業 “一番必要な時に、素早く支援の手を”



広島県尾道市・三原市協働サテライトセンター



北海道胆振地区
安平社協事務局長と



NPO法人
神奈川災害ボランティアネットワーク

理事長 河西 英彦

東日本大震災以来、残念ながら自主的なボラバス事業が停滞していました。

7月発生の西日本豪雨災害は11府県に及ぶ広域災害で早い段階から支援基準である激甚災害指定が公表されていました。急遽、臨時理事会において災害被災地支援活動要綱を制定、全員合意のもとにボランティアバスを派遣することを決定し、先遣隊として岡山県総社市・倉敷市に先ず入りしました。「桃太郎伝説」吉備団子名物の総社市は水害に加え、アルミ工場の水害による爆発事故も加わり、家屋の浸水と爆風による家屋の破壊が広範囲に広がり、ボランティア活動も多岐に渡っています。倉敷市真備町は4,000戸にも及ぶ水害で、全ての家財道具が災害廃棄物となり道路わきにうずたかく積み上げられており、家屋内の泥出しや、洗浄は1か月が過ぎた今日も続いています。残念なのは行政のハザードマップは正確に予測を伝えていたが、その対策までには及ばなかったことです。一方、人的被害の多くは過去の被害でも同様に繰り返されている「正常性バイアス」「自分だけは大丈夫、自分は悲劇的な場面には遭遇しない」ストレスを回避する潜在意識が避難の初動を遅らせ命取りになってしまいました。今回の水害でもこうした人生経験の長い高齢者の被害が多

く、地域活動の中で啓発活動を進める必要性を再認識しました。

神奈川県社会福祉協議会が広島県尾道市・三原市のボランティアセンターを支援している情報を得て、先遣隊として広島県尾道市・三原市の社会福祉協議会とボランティアセンターを訪問し、情報収集とボラバス派遣の手順を確認しました。岡山県と比較すると広島県は広範囲に被災地が散在している印象でした。

一昨年度より【受援力】の推進をテーマとして活動してきましたが、今回の総社市では多くの事を学びました。

- ・地域全体の防災意識と支援力こそ受援力の源である事が実証されていた。（後の機会に・・・）
- ・支援力も効率的な質の高いボランティア支援を提供出来るよう心掛ける必要性を実感した。

今回のボラバス派遣の振り返り報告会の開催や、ボランティアさんのネットワーク化も視野に入れています。

イザの時に、災害時に多くの支援を素早く得るには、日常から体制を整え効果的、効率的な支援活動が重要である事を痛感しました。

西日本豪雨災害被災地へのボラバス派遣事前調査

派遣場所：広島県尾道市、三原市
派遣日時：平成30年8月3日
派遣人数：2名

品川駅発7時17分の新幹線で福山駅にて乗り換え、新尾道駅に11時に着きました。尾道市社会福祉協議会、災害ボランティアセンターを訪問し、KSVネットの概要を説明し団体での受け入れについて相談をしました。

尾道災害ボランティアセンターのHPではボランティア受け入れが40名となっているが、三原市との市境にあるサテライトの福地ボランティアセンターは両市の協働運営であり、現在ニーズを調査中で、受け入れが可能な返事を頂きましたので、早速福地ボランティアセンターを訪問し、センター長にお会いして受け入れ要請をさせて頂きました。

同ボランティアセンターまでは道幅が狭く大型バスの乗り入れは困難で、最寄りの駐車場から徒歩での移動となり、ボランティア活動の被災現場も全て徒歩での移動となります。裏山からの土砂が家屋へ流入しているのが多く見られ、作業は土砂の撤去が多くなると判断できた。

三原市社会福祉協議会を訪問して事務局長に福地ボランティアセンターに派遣する旨を伝えました。

三原市のボランティアセンターは南方コミュニティセンターに開設され、横浜市の社協職員が2名支援

に入っており現地の情報交換ができました。同センターは三原市街から車で30分程度かかる所にあり、活動場所は沼田川に沿った地区で、

上流の広島市のダムの放流もあり、堤防を乗り越え広い範囲の工場や民家が被災していました。

三原市は近くにドライバー休息施設がなく、入浴施設も車で30分以上かかる点と、活動場所まで道路の渋滞が予想され、大型バスでの派遣は困難であり今回の候補地とはならないと判断。神奈川県社協を始め県内社協が支援している、三原市と尾道市を視察の結果、尾道市へのボランティアバスの派遣を決定しました。

市内の入浴施設を訪れ、40名程度が入浴、休息出来るかを確認した。市内にはビジネスホテルが多くありドライバーの休息場所の確保は易しいと思われました。

15時40分三原駅を発ち、品川駅に19時30分到着いたしました。



南方コミュニティセンター
三原市災害ボランティアセンター

西日本豪雨災害ボラバス報告会開催される

日時：2018年11月17日(土) 17:00～
場所：かながわ県民活動サポートセンターにて

開会宣言後に今回の豪雨災害で亡くなられた方を悼み参加者全員で2分間の黙とうを捧げ、河西理事長の挨拶がありました。

来賓としてお招きしたかながわ県民サポートセンター 藤代早苗氏、神奈川県社会福祉協議会 天野卓氏、神奈川県共同募金会 中島孝夫氏よりお言葉を賜った後に、KSVネット高坂副理事長から大規模な災害における被災地支援のための要綱「NPO法人神奈川災害ボランティアネットワーク災害被災地活動要綱」と「KSVネット西日本豪雨災害被災地支援委員会」設立から派遣までの経過報告がありました。

そして神奈川県社会福祉協議会、横浜市鶴見区社会福祉協議会等の県内社協の取り組み報告がなされました。

ボランティアバスの報告はかながわ災害ボランティアバスチームから石橋友晴氏が7月20日、21日、22日の第1便はNHKの取材が入り、生中継で放送される中、岡山県総社市へ出発しました。ア



ルミ工場爆発のアルミの回収を依頼されたがすごい猛暑だった等の報告。参加40名。第2便は台風のために中止。8月10日、11日、12日の第3便は「かながわ“平成30年7月豪雨”ボランティア活動支援プロジェクト」に協力し夏休み中の高校生・大学生を対象とした参加費無料のボランティアバスが倉敷市へ向かったが、帰省ラッシュの大渋滞に巻き込まれ、ボランティア活動が出来ず災害ボランティアセンターを案内してもらい研修を行った。高校生12名、大学生8名の総勢42名。8月17日、18日、19日の第4便は相模原市社会福祉協議会より職員が派遣されている尾道市で活動。参加33名。第5便は雨で中止。第6便は9月22日、23日、24日に倉敷市。参加36名。テーブル毎にフリートークに入り様々な思い、体験、意見、要望、感想などが出され、各テーブル毎に発表がありました。河西委員長より「皆さんから出されたものを活かして行くことが発災時に私たちの街の復興を早めることになる」と述べられ閉会となり、今後のボラバス派遣と神奈川の受援力向上に向け大変有意義なひと時を過ごすことが出来ました。



「ビッグレスキューかながわ」に、神奈川災ボラ250名が参加！ ～平成30年度神奈川県・海老名市総合防災訓練～

2018年8月26日、大規模地震を想定した平成30年度神奈川県総合防災訓練（「ビッグレスキューかながわ」）は海老名市上郷にある神奈川県立相模三川公園で開催され、人名救助や災害復旧に向けた相互連携を確認しました。

海老名市社会福祉協議会及び県央地域の社協、海老名災害ボランティアネットワークなどが現地に設置した「災害救援ボランティアセンター」に、神奈川災ボラに加盟する各団体から約60名がボランティア登録をしてセンターの運営訓練に協力しました。



河西理事長の挨拶

神奈川災ボラは、海老名の災害救援ボランティアセンターに連絡要員を派遣すると同時に、横浜駅前の県民サポートセンター内に設置した神奈川県内4団体

（神奈川災ボラ、神奈川県社協、神奈川県民サポートセンター、共同募金会）の連絡本部と、災害復旧に向けた人員や物資などに関する情報連携訓練を実施した。

神奈川災ボラは相模三川公園内の展示・体験コーナーに出店し、延べ200名を超える見学者を向かい入れ、神奈川災ボラの活動をPRしました。



連絡本部との情報連絡訓練



余りの暑さに木陰に集まる参加者



配られた参加証明書

第39回 9都県市合同総合防災訓練に参加

「防災の日」の9月1日(土)、川崎市で「第39回九都県市合同防災訓練」が行われました。現在、私たちの住んでいる九都県市の地域は、約3,600万人の人口を擁し、政治・経済などの中枢機能が集積していますが、「首都直下地震」や「東海地震」の発生が懸念されており、これらの地震による被害の影響は各方面に及ぶことが予想されます。

こうした大規模災害に備え、この訓練は埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、横浜市、川崎市、千葉市、さいたま市、相模原市の九都県市で毎年、防災の日前後に合同で防災訓練を実施されているものです。

訓練は、首都直下型地震を想定、自治体、消防、警察、医療機関、自衛隊、海上保安庁、各種ボランティア団体、企業など約120機関、約8,000人が参加して実施されました。

川崎区東扇島東公園会場では、ヘリコプターを使った負傷者緊急搬送訓練、一斉放水、救援物資受入訓練、ライフライン応急復旧訓練、高所ビルなどからの救出救助訓練などが実施されました。川崎マリエン会場では、災害対応車両の展示、自衛隊による炊

き出し訓練、起震車体験、エコノミークラス症候群予防体操、ペットボトルでシャワー作り、毛布で担架作りなど、誰でも参加できるイベント



サテライトのボランティアセンター入り口

が行われました。体験ブースでは床板はがし、防災クイズコーナー、災害食の試食、自衛隊カレー、など一般市民が大勢、参加していました。神奈川災害ボランティアネットワークと川崎災害ボランティアネットワークもマリエン会場にブースを開設、災害時のお米配布や川崎社協と連携のボランティアセンター開設訓練、ダンボールでのトイレ作りやベット作り体験を実施しました。

当日、支援室（県民サポートセンター 武藤氏・齋藤氏の2名）と訓練会場（川崎マルエツ 吉田氏・植山氏の2名）をフェイスブックメッセージで画像を見ながら交信訓練を実施しました。



ボランティアセンター立上げ訓練



床板はがし訓練



救出訓練